

ラテン語と

秋山 学

名言・金言による比較言語学

フランス語 1

これから半年間の予定で、ラテン語の名言・金言を取り上げながらフランス語訳を参照し、言語の構造について比較しつつ考えてみます。

まず第1回目は、フランス語からラテン語に入った方ならば、誰もが最初に思い浮かべるであろう『ガリア戦記』の著者として、ユリウス・カエサル (B.C. 100–44) の名言を探してみたいと考えました。ところが早速、難題が持ち上がります。小アジア・ポントスの王ファルナケースとの戦いに際し、カエサルが遺した言葉として知られる「来た、見た、勝った」(veni, vidi, vici) とか、刺客の一人ブルトゥスに対して向けたとされる「おまえもか、息子よ」という言葉は、カエサルの言葉としてあまりに有名ですが、その出典テキストとなるのは、いずれも彼自身の著作ではなく、スエートーニウス (A.D. 75–140) やプルタルコス (A.D. 45–120) といった後世の伝記作家たちの作品だからです。しかもプルタルコスはギリシア語で著述していますし、上に引用した「おまえもか、息子よ」の出典であるスエートーニウス『ローマ皇帝伝』も、この部分をギリシア語で引用しています(ちなみにシェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』ではラテン語になっています)。

カエサルは有能な軍人また政治家として著名ですが、文筆家としても名高く、彼の著作『ガリア戦記』と『内乱記』は、ともにラテン文学史上屈指の古典作品です。カエサルの文体は簡潔で明瞭、力に満ちていて、ラテン語文体史の上ではもう一方の流麗・優雅を代表するキケロー (B.C. 106–43) と並び称せられます。そこで今回は、政治家としてもライバルであったそのキケローが、修辞学書の一つ『ブルトゥス』の中で、カエサルの文体を批評・称賛した部分から一文を取り上げてみることにします。ちなみにこの作品是对話篇形式を取っていて、先に挙げたあのブルトゥスが、友人アッティクスとともにキケローの対話相手役を務めています。成立年代は紀元前46年とされていますから、カエサル生前の時期です。

[原文] nudi enim sunt, recti et venusti, omni ornatu orationis tamquam veste detracta.

[仏訳] Ils sont nus, vont droit au fait, ont une grâce sans aucune apprêt oratoire, comme un corps dépouillé de son vêtement.

[拙訳] (私キケローは言った), 「(カエサルの文章は)あらゆる修辭的裝飾を, あたかも衣服を脱ぎ去るかのようには排し, 虚飾なく真直ぐで美しい」 (*Brutus*, 75.262)

キケローの原文では, 末尾の ‘omni ornatu orationis tamquam veste detracta’ の部分が「独立奪格」(ablativus absolutus)と呼ばれる構文になっています. 難しく聞こえるかもしれませんが, 仏文法や英文法でおなじみの「独立分詞構文」という構文は, 実はこのラテン語構文の影響下に発達したものだと言えます. この構文は, 主部 A と述部 B に該当するものが共に奪格に置かれ, 「A が B なので」とか「A が B すると」といった形で理由・条件・譲歩・時間的關係などを表現しつつ, 主文を修飾する構文です. 上の文章では, A に当たるものが ‘omni ornatu orationis’ と ‘veste’ の二つになっていて, その双方の述部として ‘detracta’ という奪格形が置かれているわけです. detracta というのは ‘detrahere」[取り去る]という動詞の完了受動分詞・女性奪格形です. 女性形になっているのは, その前にある ‘vestis」[衣服]が女性名詞だからですが, この文章の場合, 上述のように ‘ornatus」[裝飾]に対しても述語として働いています. ‘ornatus’ は男性名詞ですが, この場合のように二つの主部を一つの述部で受ける場合, 近いほう, つまりこの場合なら ‘vestis’ の性に合わせて受けるため, 女性形になっているのです.

ところで, 上に併記したビュテ叢書の仏訳では, この独立奪格の部分に ‘corps’ という新たな主語が導入され, 構文を変えた上で訳されています. その際「衣服」を主語とする構文は, フランス語の語法に馴染まないという意識が働いているようです.

そもそもラテン語で「独立奪格」という構文が必要になるのは, 現在あるいは完了という時制の下での分詞形としては「現在能動分詞」と「完了受動分詞」しか存在せず, 「完了能動分詞」というものが存在しないということによります. これはラテン語にとっては宿命的な構造的欠陥とも言えるものかもしれませんが, それがかえってこの「独立奪格」構文を発達させる結果となりました. 上の文章では, 本来「取り去る」(detrahere) 行為にとって目的語であるはずの「裝飾」(ornatus) や「衣服」(vestis) が主語に置き換えられ, detrachere を完了受動分詞化して述語に据える, という一見複雑なプロセスが見られます. しかしながらこのように, 独立奪格構文は基本的に主部 A と述部 B の 2 要素だけで成立する構文であるため, ラテン語の簡潔さを際立たせる結果となるわけです.

ラテン語では, この「独立奪格構文」が極めて高い頻度で登場します. それは, 文法構造の面では必ずしも整備されていなかったラテン語という言語が開拓しえた, 意味の凝縮した大胆な表現空間であったと言えるのではないのでしょうか.